



時事通信社 編集局内政部長
久保 善敬

育て「卒東京」人材

私が勤務している東京・銀座の街並みは、外国人の姿を抜きに語れない。歌舞伎座には、その伝統的な外観を写真に納めようという海外からの観光客が後を絶たない。数年前に勤務した札幌でも、高級カメラを掲げた海外からの来訪者が目立った。

特に親日的なことで知られるのは台湾の人たちだ。台北特派員に尋ねたところ、テレビや雑誌には日本の情報があふれ、東京や京都だけではなく、地方都市に対しても強い関心を持っているという。2014年に日本を訪れた人は延べ300万人に迫り、実に8人に1人が日本を訪れた計算となる。日本からも多くの自治体トップが訪れ、観光客誘致や県産品の販路拡大に努めている。自治体交流も深まっている。台湾にとどまらず、海外からの旅行者増を目指す自治体の施策もよく目にする。

もっか全国の自治体の懸案は、地方創生に向けた人口ビジョンと地方版総合戦略の策定だろう。先行グループは素案を公表するなどしているが、目を通してみると、国際分野に関する施策が少なくないことに気づく。例えば、航空路線の誘致や観光客増による交流人口の拡大、

留学生の地元就職支援、若者の留学支援、多文化共生、「MICE（マイス）」誘致、グローバル社会で活躍する人材育成といった具合だ。

この地方創生の延長線上では、インターネットで得られる二次情報にとどまらない、直接的な人的交流、海外への人材派遣の重要性が高まっていくはずだ。国際交流を、東京を飛び越え、さらにその先にある世界へと視線を移し、多様な価値観に触れることととらえれば、なおさらだ。そうした経験は結果として、地域の良さを再発見する機会になり得る。

東日本大震災後、「地方暮らしにこそ可能性がある」として、首都圏から地方への移住を考える人たちが増えている。猛烈な東京一極集中の流れを変えるところまではいかなくても、「卒東京」を志向する人材は確かにいる。移住施策に力を入れる自治体の動きも後押しするだろう。

そんな今だからこそ、国際交流を通じて、都会、とりわけ東京に縛られる「向都離村」の考えにとらわれない、そんな価値観を持つ人材育成の好機ととらえてはどうだろう。



にぎわう歌舞伎座。海外からの観光客も目立つ

プロフィール

- 久保善敬（くぼ よしたか）
- ・1987年時事通信社入社
- ・内政部、仙台、大阪、札幌支社で勤務したのち、2013年7月より現職
- ・51歳
- ・広島県出身